

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	川口隆行『広島 ヒロシマ 抗いの詩学：原爆文学と戦後文化運動』 琥珀書房、2022 年
Author(s)	入山, 優士; 土田, 野乃子; 橋本, 峻; 水羽, 信男; 向原, 世十佳
Citation	アジア社会文化研究 , 24 : 69 - 79
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53975
URL	https://doi.org/10.15027/53975
Right	
Relation	



書評

川口隆行^{ヒロシマ}『広島 抗いの詩学：原爆文学と戦後文化運動』 琥珀書房、2022年

入山優士、土田野乃子、橋本峻、水羽信男、向原世十佳¹

はじめに

著者の川口隆行は、原爆文学という研究分野を精力的に開拓し、「原爆文学研究会」の第1期をリードしてきた。この研究会の成果は、2002年に創刊され、現在まで継続している『原爆文学研究』を参照されたい²。

この間、著者は『原爆文学という問題領域^{プロブレマティーク}（増補版）』（創言社、2011年、初版は2008年）を公刊した。そこでは被爆という事実を被害の側からのみ喧伝することで、日本の加害の歴史を免罪しようとする動きを峻拒する姿勢を明示している。また『「原爆」を読む文化事典』（青弓社、2017年）のように、極めて有益な工具書も編集した。

本書が扱う1950年代の文化運動については、思想の科学研究会編『共同研究 集団：サークルの戦後思想史』（平凡社、1976年）をひとつの嚆矢として研究が深まり、21世紀に入ると学界の関心がそれまで以上に高まった³。著者はこうした研究動向をリードする研究者の一人でもあるが、本書は広島という地域にこだわり、冷戦という国際情勢を踏まえ、一国史の枠にとどまらず、広くアジアのなかで、改めて広島の文化運動、そして原爆文学を問う。著者の問題意識に関しては、以下のような指摘もある。

原爆という過去の暴力を、いままさに目の前で起こりつつある暴力〔朝鮮戦争〕の問題へと結びつけようとする試み……その可能性と限界について考えることは、やはり現在進行中の暴力との向き合い方を私たちに示唆することになるのではなかろうか(182頁、以下、()内の数字は本書の頁数を示す。また〔 〕内は評者の補記である。以下、同様)。

本書は冷戦構造を創り出し、それを人びとに強いる権力に対抗しようとした文化運動に着目するとともに、被爆者を沈黙させ差別し、そして忘却しようとする力に抵抗した人びとの作品の、当時のそして今日における意味を検討してゆく。広島の有名・無名の人びとは平和と民主主義の実現を求めて、自らの思いを主体的に文字に表わした。その創作活動は抵抗を目指すがゆえに左派の政治闘争と関係を持たざるを得なかったが、それに一方的に従属するのではなく、運動と関わることで文学としての深化を求めた。その姿を分析した本書は、今日原爆文学研究・1950年代文化運動史研究の到達点を示し、極めて今日的で論争的な一書である。

具体的には次のような構成をとっている。第Ⅰ部：サークル運動論（①『われらの詩』における詩作品、②『われらの詩』から『われらのうた』へ、③動物たちの原爆文学、④四國五郎と辻詩、⑤『ヂンダレ』と『琉大文学』にみる広島・長崎・ビキニ）、第Ⅱ部：復興批判論（⑥朝鮮戦争と民衆の自画像、⑦「声」を拾い集め、編み直す、⑧カタストロフィと日常の交差、⑨復興する街を書き直す）〔副題は省略〕。以下、各章ごとにまとめてゆく。

1. 本書の概要

『われらの詩』を読むにあたっては、刊行期間が朝鮮戦争期であること、女性や在日朝鮮人といったジェンダー・エスニシティの問題などが存在することを見逃さず、「一国主義的な歴史の見取り図に回収」させないことが求められるとしたうえで（21）、著者は第1章で5つの詩を挙げている。林幸子の「ヒロシマの空」には妻と息子を見捨てた父、原爆症の父を救えなかった娘「わたし」の罪や恥の感覚とともに「反戦平和」表現といった「定型への志向」も見られる（28）。一方で「ヒロシマの／蒼い空」と「わたし」の埋められないさみしさの対比、「グロテスクなまでの即物性と親子の情愛」の拮抗など（26）、一つの作品の中で様々な力が揺れ動いている。峠三吉の「一九五〇年の八月六日」は、在日朝鮮人も携わった朝鮮戦争下の反戦運動が題材となっている。しかしこうした側面は「後景に退き、日本人による反戦反核運動の原点として」記憶されているという現状がある（36）。著者は「戦後日本という枠組みを超えた、東アジア的光景の広がり」に広島を置きなおす想

像力が求められている」と指摘する(36-37)。女性詩人の作品である引地きみの「だいこん」、杉生直子の「古い家」も取り上げられている。日常にありふれた光景から「身体に刻まれたジェンダー規範の律動とそれへの懐疑」が表現されており(37)、『われらの詩』の中にありながら朝鮮戦争、原爆体験、政治的スローガンを含まないものの「忘れ去られる存在、小さな光景を静かに見つめた佳作である」(42)。望月久の「とまどい—弔慰金によせて」では、貧しい家族が弔慰金を手にして喜びをかみしめる裏で長女の死が忘却されるさま、そのことへの「とまどい」が描かれている。この詩を書いた望月自身も復興から取り残された「難民」であり、「難民の思想」の実践を試みていた(47)。楽天的な響きを持つ復興という言葉に、「難民」の立場から一石を投じた作品である。

2章では、1950年前後から60年初頭までの広島のカンパニー運動の軌跡を、『われらの詩』と『われらのうた』という雑誌を中心に概観している。『われらの詩』は前章に詳しいが、峠が中心となり刊行された雑誌で、同時期に全国で展開された朝鮮戦争期の対抗運動の一つであり、その中の原爆表現は朝鮮戦争への応答としての側面を強く持っている。1953年に終刊した『われらの詩』の後継誌である『われらのうた』は、うたごえ運動や「書きまくる運動」との強いつながりが指摘される前期と、大衆化路線から詩創作への志向を強めたとされる後期に分けられる。毎年行われた峠三吉祭では原爆詩の類型化という問題が議論され、島陽二『「原爆詩集」試論』では『原爆詩集』の批判的検討がなされた。これらの動きは、原爆詩に今現在の私たちがどう向き合うのかという問題意識に基づいたものであった。

3章では『原爆詩集』「序」にある「にんげんをかえせ」という言葉をきっかけに、村上克尚「動物の声、他者の声：日本戦後文学の倫理」の「《人間》」という概念が《動物》への暴力を含んで成立していることを考えるとき、人間性の規範に同一化を果たすことで、戦争やジェノサイドのような巨大な暴力を乗り越えるという道は本当に正しいのか」という問いを原爆文学という領域にも共有し、『原爆詩集』にみられる動物表象をいくつか検討している(81)。そして「にんげんをかえせ」という言葉は、主体の分裂あるいは喪失といった事態と、主体の統一あるいは回復といった事態とに引き裂かれてい

る」とし、「動物の表象は、そうした引き裂かれた、揺れ動きそのものを表す」と結論する(94)。最後に、石牟礼道子『苦海浄土』を参照しながら、人間性という言葉の内実を見直している。

第4章では、四國五郎のシベリア抑留時代の経験と広島サークル活動の繋がりを視野に収めつつ、特に朝鮮戦争期の広島で展開した辻詩の運動と表現の様態について整理している。四國はシベリアから広島に帰郷後『われらの詩』に参加することを決意し、自己の来歴を振り返るため画文集『わが青春の記録』を執筆した。そこに記録されたシベリアでの民主運動の様子から、四國が学んだのは獲得した知識や情報を「吟味し、批評することで、自らを作り変える力」だと著者は推測する(116)。われらの詩の会では四國と峠三吉が共同で辻詩の制作をした。「朝鮮戦争反対運動にもっとも果敢にコミットした時期に、シベリア抑留の民主運動で獲得した表現の方法と姿勢を手掛かりにして、自由かつ柔軟な表現の実験を試みた」四國の活動から著者は「運動(政治)か表現(芸術)か」という単純な対立図式ではとらえきれない、両者の複雑な関係性を考える糸口が存在しているのでは」と問いかける(131)。

第5章では、在阪朝鮮人青年が創刊したサークル詩誌『ヂンダレ』と琉球大学学生が創刊した文芸誌『琉大文学』の第一期を取り上げ、両誌に描かれた核・原爆の表象と言説の意義を明らかにし、その中で広島という場所やイメージの問題を外部から相対化しようとする視線を剔出する。著者は『ヂンダレ』に寄稿された洪宋根「鳩と空席」から「広島」と「朝鮮」の「痛みを繋げる回路が急速に閉ざされていく同時代の言説状況に対して、『広島』への期待が裏切られる痛み」を(151)、金時鐘「南の島」では「『唯一の被爆国』という閉鎖空間が今まさに形作られようとする状況に向けられた痛烈な批判」を読み取る(154)。『琉大文学』掲載の喜舎場順「惨めな地図」では「日本本土と沖縄の分断による沖縄の民衆の痛みが、分断と対立を強いられた朝鮮半島への想像力を駆動させる力となっている点」を見るべきとし、「分断と対立がいまなお継続する東アジアの光景の広がり」を視野に収めている(162)。

山代巴の「或るとむらい」は、GHQの農地改革と「朝鮮特需」により豊かになった村人たちが、豊かさを守りさらに豊かになるために、村に流れ着いた被爆者一家を排斥する様をリアルに描く(第6章)。この小説は「特需と

復興の陰で、原爆体験を終わったものとして抑圧し、被爆者の苦しみを忘れ去ろうとした占領期・朝鮮戦争期の問題を炙り出した(177)。そうすることで山代は、被爆者を「見つめる「私たち」のグロテスクな現実の姿」を示している(180)。同時に、著者は小説の末尾の、主人公のアサ代には村に流れ着いた被爆者への「親切もまだ湧いては来なかった」の「まだ」という修辭に着目する。この表現は読者に“いつか主人公、そして私は被爆者と連帯するのだろうか、それとも……”と考えさせ、「深い思考に誘う」(179)。山代にとって文化運動は、「表現による他者との出会い、公共性の探索の軌跡とでも言うべき実践」だったのである(180)。

原爆を体験した人びとの体験集は数多いが、山代らが関わった『原爆に生きて』は「原爆被害者の会」の運動と密接な関係をもって編まれた点で、特徴的であった(第7章)。その編集方針は、①日本の主権の回復、原爆報道の隆盛という新たな状況のもとでも続く、被爆者の物質的・精神的な苦痛を明らかにする、②さまざまな社会的なしがらみのなかで、本心を吐露できない被爆者の手記をあえて「弱い」まま掲載し、そのことによって被爆者を沈黙させる社会の現実を描く、の2点であった。その結果、この手記は赦しや和解を広めようとする当時のメディアと一線を画し、被爆者の「生」のありようを示し、主体的な能動性のみでは捉えきれない現実を読者に知らしめた。また被爆者にとどまらない「原爆被害者」の存在にも目を向けさせている。それは「差異を消去した同一化の論理とは違う異質な者の連帯の可能性と挫折」を描く先駆けとなったのである(206)。

原爆投下のような日常が一転するようなカストロフィに出会うと、人はこれまで使っていた言葉を喪失し、これまでと同様に言葉を紡ぐことが難しくなる。それを放っておくと、被害者は自分たちを憐れむことで一体化し、他を排除するような共同体を生み出しかねない。いうなれば被害者と加害者の固定化である。しかし、それではどれだけカストロフィの悲惨さを訴えても凡庸で陳腐な表現にしかならず、ひいては反戦・反核の実現が難しくなる。そこで重要なのがカストロフィを表象する行為だ。なぜか。そもそもカストロフィの現場では誰が被害者で誰が加害者なのかが固定化されていない。そして生と死が入り混じる混沌とした場所でもある。そうした状況を

描くことは、作品の読者がカストロフィを体験していなくても追体験できるということであり、読者が生と死、被害と加害が固定化される前の現場に触れ、原爆についての被害と加害の問い直しが可能となるからだ(第8章)。

原爆に関してはみんなが被害者であり加害者でもあるから、責任の追及はしないという姿勢は間違いだと著者はいう。原爆をめぐる加害と被害がどのように交錯してきたのかを自分のこととして問い直すことが、「過去、現在、さらには未来の人や社会のありようを深く思考させる」(227)。その営みに一役買ったのが作家大田洋子である。大田は戦後、復興という言葉では掬いきれない人々がいるにもかかわらず、構わず復興を推し進める風潮に違和感を抱いていた。そこで彼女はそうした人々を一つの物語として描くことにした。そうしてできた『夕風と街と人と』では、戦後の広島街の記録をあえて粗削りに描くことで、読者が批判的に介入できるような「隙間」(253)を設けている。著者が『夕風の街と人と』を差異の表象であると評す所以は、復興という言葉では汲みきれなかった人々の交流が描かれている点にあり、その描写こそが差異を顕在化させ重ね合わせるという、彼らの希望に結びつく営みでもあるのだ(第9章)。

2. 本書の成果と課題

本書から学んだ点が多いが、まず指摘すべき点は、本書を読み検討するなかで、自分たちのなかにあった原爆被爆者に対する特別視がなくなっていったことである。おそらく若い世代にとって、原爆被害の実相に向き合うことは、強いストレスを感じるものであり、時に意図的に目を背けることもあるだろう。それは東京電力の福島第一原発のメルトダウンによる被害についても同様である。丁寧に周囲を見渡せば、テレビ番組など日常のなかにも、広島・長崎、福島における核による被害や、「復興」のいかがわしさについて考える素材は数多い。だが、あえて直視することを避けることもあるだろう。

本書はこうした障壁を越える力を、評者たちに与えてくれた。それはなぜなのだろうか。まず本書が中央文壇のエリートではなく、広島のカジュアル運動を分析対象の中心としたがゆえに、登場人物の多くが、私たちと変わらないごく普通の人たちだったことがある。彼ら・彼女らは、ステレオタイプ化

された「平和の闘志」でもなければ、時に質問することさえ憚られる「証言者」でもない。引地の「だいこん」などは、時代をこえて評者たちの共感を呼ぶ作品だった。彼女のような人も「われらの詩の会」に参加していたことは、新たな発見であった。

また本書は原爆について表現した人だけでなく、古い家族制度や地域のしがらみのなかで、語ることを自粛せざるをえない人びとの存在に眼を向けさせ、さらには語らない人びとを代弁しようとする、あるいは閉じた口を無理にこじ開けようとするのもつ暴力性についても、評者たちに考えさせた。こうした新たな知見もまた評者たちに、広島・長崎、そして福島の問題を知ることの重要性を気づかせてくれた。ステレオタイプ化された物語だけが、実相ではないのである。

評者たちをヒロシマから遠ざけていたもう一つの要因が、正解を受け入れることを一方的に強制するような平和教育や平和運動だったように思われる。こうした印象が評者たちの誤解に基づくものであったとしても、本書が提起した“知り得たことに安易な意味づけをせず、その事実について考えつづけることが大切だ”との主張は、評者たちに勇気を与えるものだった。たとえば、峠三吉の「ちいさい子」の禍々しい暴力性の指摘や(90)、沈黙を破って語りはじめた被爆者の声こそが重要だという「決めつけ」を排除し、なぜ口を開けないのか、またどのようすれば語ることが可能となるのかについて真摯に考察し、運動を進めた山代の取り組みについての分析(第7章)は、評者たちに強い印象を与えた。著者にとって、読むことは単に知るための実践ではなく、考えるための行為なのだ。巷間では「まず知ろう」とよく言われるが、それは知った人間が、考え続けるためなのである。

そのうえで著者は開かれた空間で、作品が語られ、批評されることの重要性も強調している。考え続けるためには、唯我独尊になってはならず、つねに他者との対話が必要ということなのだろう。本書は1950年代における運動の内部での諸議論を紹介しているだけでなく、まさに本書そのものが著者と読者が対話するための貴重な「公共」の場となっている。

方法論の面で学んだのは、テキストそのものを分析するだけでなく、テキストが生み出される時代状況を十分に踏まえて議論すべきとする著者の態度

だった。その成果を象徴的に示しているのが、峠三吉の「朝」が描く核の平和利用への期待である。アーサー・ビナードは、岩波文庫版『原爆詩集』の解説で、「朝」における「ゆめみる」という言葉の繰り返しに峠の諷刺の意図をくみ取ろうとする。しかし「朝」の執筆がソ連による核エネルギーの平和利用の強調後であって、米国の核の平和利用宣伝の前であることに著者は着目する(89)。時期的に峠の「朝」のねらいは、米国の核エネルギーの平和利用への諷刺ではありえないのである。

このように知的な刺激に富む本書だが、それは今日の問題を理解し解決するためのヒントを1950年代に求めるという著者の姿勢に起因していた。この点は「はじめに」でも触れたが、この著者の姿勢を根底で支えているものを、評者たちなりに敷衍すれば、被爆など言語を絶する大惨事を経た後に、その極限状況から人が再生する可能性はどこにあるのか、その方策を知りたいという問いであろう。

この点について、著者はトリートやホワイトに依拠しながら、「能動態」でも「受動態」でもない「中動態」の実践から論じている。そこで言われているのは、“私”の外部にある現実が実存すると前提とし、“私”はそれを客観的・論理的に描きうろという想定を否定し、それでもなお“私”は敢えて書くという行為のなかにしか、極限状況を描く方法はない、ということであろう。同時に、著者や評者たちを含む読者も、作品を“私”の外部にある客観的な対象と理解することはできず、“私”の経験のなかで当該のテキストを位置づけなおし、再検討するしかないようだ。こうしてこそ、開かれた対話が可能となり、「公共性」を得ることができる、と著者は考えているのではなかろうか。

このように学ぶべき点の多い本書だが、あえて著者が明示しなかった問題もあるように思われる。たとえば本書は在日朝鮮人の文学実践のなかから、彼らの広島への期待と失望とを論じ、今日とは異なるもう一つの広島の可能性を指摘している。だが、軍都広島を歴史を持ち、戦後復興のなかで被爆者のかかえる諸問題を隠蔽した広島の行政と、生き残った被爆者だけでなく、新たに流れ込んだニューカマーを含む多数派の広島市民が、もう一つの広島を作り出す可能性はどの程度あったのだろうか。また広島の人びとが願うこ

とができたとしても、日本政府の政策にそうした願いを反映できたのだろうか。こうした現実政治に関わる問題である。

本書は 1950 年代の文学運動とその作品を主たる研究テーマとする学術書であり、上記の問いに答える必要は当然ない。しかし 1950 年代の広島の実践のなかから、今日の広島とは異なる広島を生み出す可能性を探ることは、今後の課題として残されている。たとえば本書の叙述のなかでは、批判対象としてややステレオタイプ化されている印象のある今堀誠二の学問と運動についても、さらに検討が必要だと思われる⁴。また戦後の広島における在日朝鮮人・韓国人の思想と行動、特に 1955 年成立の在日本朝鮮人総聯合会広島県本部のメンバーと、広島の左派との「連帯」の実際についての検討も、今後課題となる。著者は深川宗俊が 1970 年代に入って朝鮮人徴用工の歴史を発掘したことに言及しているが、1950 年代の左派の内部においても、批判すべき点とともに、再評価される実践はあるのではなかろうか。いうまでもなく、文学作品に描かないことが、両者の連帯の断絶を意味するわけではないからである。

ただこれらの課題は本書に触発され、評者たちが考えてゆくべき今後の課題である。

おわりに

著者の視点は 1960 年代以降にも続き、また広島だけにとどまらず、アジアへと広がる（「おわりに」・「あとがき」）。その意味で今後続く壮大な研究のために、本書は充実したベースキャンプを構築したといえよう。その重要性はなんと指摘しても足りないが、ヒロシマを軸にどのように「連帯」の輪を広げることができるのだろうか。その答えは多様だが、本稿の最後にこの点について、本書に学びながら少し考えてみたい。

よく言われることだが、“平和の軸”は日本国内でも地域によって、また個人のおかれた立場によって異なっている。たとえば被差別部落の問題を重視する人びとにとって、人権の擁護こそが紛争解決にとってなによりも重要である。また 2021 年の京都ウトロの放火事件に象徴されるように在日外国人への差別も、大きな問題である。世界に眼を広げれば、Me Too 運動も、Black

Lives Matter 運動も継続されている。こうしたさまざまな「平和」を脅かす脅威に対する抵抗運動を進める人たちに、どうやって広島の問題を理解してもらうのか、同時に、広島側がこうした諸問題をどのように理解するのか。

「連帯」の前に難問は山積している。この点について本書が教えてくれたのは、自らの痛みを共鳴板とするしか、他者の痛みを理解することはできず、そこからしか対話は始まらない、ということだった。

また被爆を実際に体験した世代が急速に少なくなる時代がやってきている。被爆の体験証言や被爆者の作品が新たに生まれることがなくなり、それらをめぐる周囲の解釈に対する当事者の異議申立もできなくなる時代が目の前である。しかし、だからこそ今あるものから何をどのようにして学ぶのが、とても重要になる。本書の興味深い「読み」の実践は、深い問題意識に支えられ、確かな方法論に基づけば、いまあるものからも多くの新たなことがら学べることを教えてくれたのである。

以上、評者たちが本書を読むなかで考えたことをまとめてみた。著者からの批判を心待ちにしつつ、本書が多くの読者、特に若い人たちに読まれることを希望して擲筆する。

注

1 本書評は、水羽信男担当の2022年度東アジア地域史演習の成果である。

2 <http://www.genbunken.net/kenkyu/kenkyu.htm> (2022/11/18 閲覧)

3 たとえばゼンダレ研究会編『「在日」と50年代文化運動：幻の詩誌『ゼンダレ』『カリオン』を読む』人文書院、2010年、道場親信『下丸子文化集団とその時代：1950年代サークル文化運動の光芒』（みすず書房、2016年）や、宇野田尚哉ほか編『「サークルの時代」を読む：戦後文化運動研究への招待』（影書房、2016年）などがある。そのほか、辻智子『繊維女性労働者の生活記録運動：1950年代サークル運動と若者たちの自己形成』（北海道大学出版会、2015年）も公刊されている。

4 この点について初歩的検討を行ったものに、水羽信男「今堀誠二の中国史

研究と核兵器反対運動：1945年前後を中心として」『アジア社会文化研究』
23号、2022年がある。